IS ―滅びの未来から―

紅鮭の塩焼き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　―滅びの未来から―

【Ｎコード】
Ｎ４３０３Ｚ

【作者名】
紅鮭の塩焼き

【あらすじ】
インフィニット・ストラトス――通称ＩＳ。突如世界に現れ、それまでのパワーバランスを引っくり返したその兵器は、今…世界を滅ぼそうとしていた。
滅び行く世界を救うために、織斑一夏と篠ノ之箒の息子である織斑春樹は過去へと向かう――――！

※注意※
この小説はＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉の二次創作です。

オリジナル主人公モノのため一夏の、使い勝手の悪さから箒の、一夏がいないことによる設定の無理からラウラの、設定がよくわからないので亡国機業の皆さんの出番がありません。
また、ＩＳの物語の都合上多くの女性キャラが主人公に想いを寄せるようになります。ＮＴＲに対して嫌悪感を覚える方は読まない方がいいかもしれません。

プロローグ　―滅びの未来―

「アルファ１よりＨＱ（ヘッドクォーター）、至急支援砲撃を要請！早くしてくれ、もう前線が――――！えぇい、まだ応援は来ないのか！」
『駄目です！北側の前線が突破され、釘付けにされています！』
「クソッ、これ以上行かせるかよ！」
「駄目だ、後退だ！後退しろ０４！」

今から３０年前、突然現れて世界のパワーバランスを引っくり返した兵器『インフィニット・ストラトス』。その兵器は、今世界を滅ぼそうとしていた。

「隊長！二時方向に反応…敵ＩＳ部隊です！」
「何！？まだ来るのか！」
「あの巨体…ギガンテス級まで！？」
「う…うわぁぁぁぁ！」
「０４！？どうした、応答しろ０４！」
「隊長！こちらにも敵機が…！」
「くっ、囲まれたか…！」

それは今から２０年前のこと。突如世界中に無人ＩＳが現れる事件が起きた。無人ＩＳはその圧倒的な性能を持って、たった一週間で主要都市を次々陥落、世界人口を四割まで減少させた。
残された人類はなんとか抵抗を試みるが、女性しか操れない有人ＩＳでは数で勝る無人ＩＳ部隊を破ることは出来ず、敵の数を減らすどころかこちらの戦力を削られていた。

「…こちらハンター１。アルファ１、応答せよ」
「こちらアルファ１！状況は見ての通りだ、援護を頼む！」

「了解…ハンター各員に告ぐ！我々はこれよりアルファ部隊を援護、そのままあのガラクタ共を殲滅する！行くぞ野郎共ッ！」

状況が一転したのは今から１７年前、ＩＳ開発から１３年後。男性でも問題なく使えるＩＳが開発されたのだ。これにより人類の戦力は倍増、本格的な抵抗を始めるのだった。
しかし、敵側はここで最強の戦力…２０年前、何人もの専用機持ちを擁し、国家代表も数名いる『ＩＳ学園』を陥落させた最強のＩＳ、《悪竜》と呼ばれる機体と《悪竜》の量産機である《魔竜》を投入。人類は再び劣勢になっていた。

「…こちらハンター５！《魔竜》が…《魔竜》が現れました！」
「何だと！？クソッ、ここまで来て…アルファ部隊！撤退するぞ！殿はこっちがやる！」
「…すまない、恩に着る！」

…そして、現在。ＩＳ開発から３０年後。人類はその数を二割まで減らしていた。

プロローグ　―滅びの未来―（後書き）

登場人物紹介

・織斑春樹

織斑一夏と篠ノ之箒の間に生まれた息子。両親譲りの優秀なＩＳ操縦技術を持ち、１７歳の若さで部隊長を務めている。

性格は一夏寄りで、戦闘時は近接ブレードを手に戦う。

搭乗ＩＳ：不知火　改式

この時代の主力量産ＩＳ『不知火』のカスタム機。

元々の不知火は何かに特化するのではなくバランスの取れた機体になっているのに対し、改式は装甲を犠牲にして機動性を高めている。

装備は長刀二本に短刀二本、それと突撃銃。通常の不知火はこれに加えて盾を装備しているが、この機体は軽量化のためにそれを外している。

ちなみに、この時代のＩＳは整備を簡単にするため、ほとんどがエネルギー兵器を装備していない。

第一話　―そして、過去へと―（前書き）

登場人物紹介

・香月悠子

叢雲副司令にして技術部のトップ。叢雲所有のＩＳはほとんどがこの人のカスタマイズを受けている。

結構マッドな人で、彼女のカスタマイズしたＩＳはいずれもピーキーすぎて生半可なパイロットには使えない。超エリート組織である叢雲だからこそ使えている。

２０年前は１５歳、つまり今は三十路半ば。未だ独身だがまったく焦りを見せない。

第一話　―そして、過去へと―

対竜特殊組織…通称『叢雲』。最強のＩＳである悪竜とその眷族である魔竜、それと戦うために精鋭ばかりを集めた超エリート組織。その１３番隊隊長を務める織斑春樹は今、基地の通路を歩いていた。現在抵抗作戦が行われている地点では魔竜が出たと言う報告を受けている。そこで出撃しようとした矢先に司令室に呼び出しを食らった。１０番隊が代わりに出たとは言え、撤退支援に一部隊ではどう考えても足りない。

「クソッ、なんだってこんな時に…」

悪態を付きながらも彼は歩き続ける。一秒でも早く話を終わらせ、出撃する。それが今打てる最善手だ。そう考えて逸る気持ちをねじ伏せ、司令室に向かう。

「…失礼します」

プシュ。気の抜ける音を立てて開く自動ドア。この基地の最深部にある司令室。そこには総司令と副司令、あと数人のオペレーターがいる…はずだったが。

「やっと来たわね、織斑」

そこにいたのは香月副司令とオペレーターだけ。肝心の総司令がいない。

「…博士、総司令は？」

ちなみに、春樹が副司令を『博士』と呼ぶのには理由がある。簡単な話、彼女はこの基地の技術者のトップでもあるのだ。叢雲の他の隊員も、正式な場以外では博士と呼んでいる。

「この下、特別研究室にいるわ。貴方にも来てもらうから」

「特別研究室…ですか？」

特別研究室とは、司令室の地下にあるシェルターも兼ねた施設のことだ。自分のような一介の兵士風情には一生踏み入る機会のない場

所だと思っていたが…
そんなことを考えているうちに副司令は特別研究室へのエレベーターに乗ってしまった。早く乗らないと置いていかれてしまう。
そして、二人を乗せたエレベーターは地下へ向かう。

特別研究室。その入り口は過去の銀行金庫を思わせる。網膜、指紋、声紋、パスワード…その全てを認証しなければその厳重な扉は開かないのだ。ちなみに、シールドエネルギー込みのＩＳと同等の防御力を誇るらしい。
「副司令、ご苦労」
副司令の言葉通り、中には総司令がいた。
「さて、織斑中尉。君にはある作戦に参加してもらう」
「――――作戦、でありますか？」
珍しいを通り越しておかしい。作戦の説明ごときを総司令自らが行うのか？それだけ重要な作戦なのだろうか…
「中尉。君には…世界を救ってもらう」
「…はっ？」
間抜けな声が飛び出した。当然だ。世界を救う？突拍子もなさすぎる。
「これが作戦内容だ。よく読んでくれ」
そう言って総司令が春樹に書類を渡す。

その作戦の内容は、さらに突拍子もなかった。
「…２０年前に戻って悪竜を倒す？」
とんでもない作戦だ。意味が分からない。そもそも過去に戻れるのか？未だに相対性理論は破られてないんだろ？なのにタイムスリップ？叢雲もとうとう血迷ったか。第一…
「私にこの世界を見捨てろと言うのですかッ！」
そう。できるできないは置いておいて、過去に戻ると言うことはこの世界の仲間を見捨てて逃げることになる。それだけは出来ない。

「違う、中尉はこの世界を救うのだ！」
「本気で言っているのですか！？過去に戻るなどと！」
「無論本気だ。この世界のためにはそれしかない」
総司令の顔に冗談を言っている様子はない…気が狂ったか。
「…タイムマシンならすでにあるわ」
今まで黙っていた副司令がまたとんでもないことを言い出す。
「副司令まで…タイムマシン？有り得ない！タキオン粒子でも見つけたと！？」
「えぇ、見つけたわ」
「…はぁっ？」
本日二回目の間抜けな声。タキオン粒子を見つけた？しかもすでにタイムマシンがあるということは、随分前に見つけていたということになる。「と言っても試運転はしてないし一方通行なんだけどね。ぶっつけ本番、しかも帰ってこれない。とんでもない作戦だわ」
「…博士がそれを言いますか」…しかし、一度行ったら帰ってこられないのか。
「…ところで、何故私なんです？」
「…色々理由はあるが、主な理由は、君が最も優れた技術を持っているのと、男性の中ではＩＳとの相性がトッププクラスだからだ」
確かに、彼は叢雲の中でもトッププクラスの操縦技術を持っているし、相性もかなりいい。それは客観的に見た事実だ。
「一度しかチャンスはないのだ。最強の戦力を送った方がいいだろう」
「…了解しました。全力で作戦に当たります」
書類を閉じ、作戦を承諾する…その時、博士が立ち上がった。
「…織斑、作戦提案者の私が言うのもなんだけど…貴方、この世界に帰ってこられないのよ？」
「百も承知です」
「それに、悪竜を倒したら…」
「その世界はこの世界に繋がらない。私が消える可能性もある…そ

う言いたいのですか？」
先に言いたいことを言われたからか、博士の顔に驚きの色が見える。
「それをわかっていて、それでもやるの？」
「はい。私の命一つでこの世界が救われるなら…」
何を言われても彼の意志は変わらない。
「…わかった。早速タイムマシンの設定に入るわ」

人の二倍程度の大きさの卵型の物体、それが博士の開発したタイムマシンだった。それに春樹は乗り込み、設定が終わるのを待つ。
「…そう言えば博士、俺は向こうに着いたらどこに住めばいいんですか？」
「当時の私の家。この書類を見せれば信じると思うわ」
さらっととんでもないことを言う。
「大丈夫よ、一人暮らしだし。この書類があればむしろ喜んで住まわせてくれるわ…あ、この書類は見ちゃ駄目よ」
「はぁ…わかりました、その書類に賭けます」
もう少しでタイムマシンの設定も終わるだろう。彼は作戦内容を思い出した。
まず過去に戻ったら過去の博士にこの書類を見せて住処を手に入れ、その一週間後にＩＳ学園の受験を受ける。さらに一週間後ＩＳ学園に入学し、あとは悪竜が現れたらそれを倒すだけ。
…それだけ聞いたら簡単そうだが、そもそも悪竜を倒すという時点で今までの作戦でトップクラスの難易度だ。
「…設定完了。織斑、いつでも行けるわよ」
「…お願いします、博士」
博士は軽く頷き、タイムマシンを起動させる。奇妙な間隔が体中に広がる。
（さよなら、世界…俺が救ってやる！）
そして、叢雲１３番隊隊長織斑春樹は２０年前に飛んだ。

第一話　―そして、過去へと―（後書き）

今回は三人称視点オンリーでしたが、次回からは一人称視点と三人称視点を織り交ぜた原作と似た感じにします。

第二話　―２０年前―

キュウウウウン…
気がついたら見慣れない場所にいた。服装はさっきの軍服のまま、手にはこの時代の博士に見せる書類も抱えている。
「…博士はこんなところに住んでいたのか」
至って普通な民家。あのマッドっぷりからはまったく想像できない。
…いや、もしかしたら地下室とか、そう言うところに秘密の研究室があるのかもしれない。あの博士はそういう人だ。
カチャ…
扉の開く音が聞こえた。どうやらこの時代の博士が来たようだ。
…この時、俺は忘れていた。自分の家に赤の他人がいたとき、人はどうするのかを…
「…え？」
香月悠子。２０年前でもその雰囲気は変わっていない。髪が濡れているのは、恐らくシャワーを浴びてきたからだろう。彼女は朝、起きたらシャワーを浴びる習慣がある。あの習慣はこの頃からあったんだな。
…ところで、彼女はなぜあんなに呆けているのだろう？
「…きゃあっ…」
彼女が悲鳴を上げようとした瞬間、全てを理解した。当然だ、見ず知らずの男が部屋にいたのだから。だが、悲鳴はマズい！
「くっ…ッ！」
全速力。体中のバネを最大活用して一瞬で彼女に接近、悲鳴をあげる前に手で口を塞ぐ。勢い余って倒れそうになるが、なんとか持ちこたえる。
…いや、この姿勢はもしかしたら非常にマズいのではないだろうか。どう見ても強姦魔だ。現に彼女の目は恐怖一色に染められている。
「…いや、これは違うんだ。俺は何も君に何かしようというわけじ

ゃないんだ」
駄目だ。一割も信じてない。と言うか何か覚悟を決めたような目になりやがった。もっと体は大事にしなさい。
…パニック起こしてる場合じゃない。抵抗する気が失せたなら今のうちに用事を済ますべきだろう。
「君にこの書類を読んでほしい。そうすれば全てがわかるはずだ」
口を塞いだ手を離し、目の前に例の書類をかざす。もちろん、悲鳴の兆候が見えたらすぐに口を塞げる構えだ。
「……」
博士は無言で何度も頷き、書類を読み始めた。あとはあの書類次第だが…
「…え、未来人？」
「なんか都合よく誤魔化すわけじゃないのかよ！」
何か上手いこと言って現代人と思い込ませるのかと思いきや、まさかの直球勝負である。いったい何を考えているのか。
「ふむ…ふむ…なるほど…」
…あれ、何か納得してもらえてる。いったいどんな手を使ったというのだろう。
「…大体わかったわ」
そうか、それは重畳だ。俺は何もわかってないけどな。
「つまり、現代での住処としてここに住みたいのね？」
「あぁ、虫のいい話だとは思うが…」
「全然構わないわよ？」
「即答してもらえるとは思わな…えっ、構わない？」
こんなどこの馬の骨がわからないような男をそんな簡単に住まわせてしまっていいのか？いや、頼んだのは俺の方なんだが。
「えぇ。こんなものを受け取ったんだもの、住居の提供くらい問題ないわよ」いったい何が書いてあったんだ、あの書類。
「あ、見せないわよ？未来の私から見せるな、って言われてるんだから」

畜生、余計なこと書きやがって。
「さて、仕事が増えたな…」
「仕事？働いてるのか？」
制服がそこにかかってるから学生かと思ったが…学校の制服ではないのだろうか。
「あぁ、単にやることが増えたってだけよ。貴方の個人情報を造らないと。戸籍もないんでしょ？」
…あぁ、そうだった。未来人の俺には戸籍も何も無いんだ。
「ハッキングでちょちょちょっとね。大丈夫、ヘマはしないわ」
めちゃくちゃ軽い。でもこの人はそういう人だ。
「助かるよ…えっと、何と呼べばいいかな？」
「別に、苗字でも名前でもいいわよ。そっちの名前は？」
「あぁ、俺は織斑春樹…あ、戸籍の苗字は違う苗字にしてくれ。この時代には俺の両親がいるんだ」
「わかったわ。じゃあ私の苗字でいい？私の親戚って設定で」
「それがいい。頼むぞ、悠子」
「よし、決まりね。戸籍とかは私が何とかしておくから、貴方はこの時代について勉強して。部屋は隣の空き部屋を使ってちょうだい」
――そうして、俺の過去生活が始まった。

織斑春樹が立ち去った後、香月悠子は彼に手渡された資料を読んでいた。そこに記されていたのは彼の参加している作戦、彼のＩＳに関する情報、そしてタキオン粒子についてなどだった。
「…なるほど、これは盲点だったわ」
彼女はすでにタイムマシンを作るためにタキオン粒子を探していた。未来の世界では１５年間かけてようやく見つけたが、答えを受け取ったならもっと早く見つけてタイムマシンの建造に入れるだろう。
「こんなものが貰えるなら、未来人一人住まわせるくらい訳ないわよね…」
そう言って笑顔を見せる。そんな彼女の顔は、実にマッドサイエン

ティストだった。

翌日。
「…あ、そうか。こんな朝早く起きなくてもいいのか…」
ついいつもの癖で5時に起きてしまった。叢雲にいた時はこの後訓練があったのだが…
「まぁ、自主練して悪いことはないだろ。これからもＩＳを使うことになるわけだし…差し当たってはランニングだな」
この辺りの地形を把握するためにもランニングはしておいた方がいいだろう。地図は昨日受け取ったし。
「…あら、春樹。もう起きてたの？」
隣の部屋から悠子が出てきた。この頃は寝てたんだな…博士は研究で二、三日寝ないなんてザラとか言ってたからな。
「あぁ、ちょっとランニングしてくる。六時半には戻ってくる」
「わかった。朝ご飯は用意しておくわ」
「サンキュー…じゃ、行ってくる」

俺は今、河原で休んでいる。
「…空気が美味いな」
未来の世界じゃこんなに空気は美味くなかった…いや、味わう暇もなかったんじゃないだろうか。外に出るなんて任務の時くらいだったからなぁ…
「さて、そろそろ行くか」
この平和を守る。その気持ちを強め、俺は再び走り出した。

そして、一週間が過ぎた。

第二話　―２０年前―（後書き）

次からはＩＳ本編に入ります。

第三話　―学園内は女の花園―（前書き）

キャラ紹介（補足）

・香月春樹（本名：織斑春樹）

趣味は作戦の合間などに見る（当時からすると）レトロアニメ。特にロボットアニメを好んでいる。いつか自分のＩＳにも必殺技が欲しい。

見た目は真面目そうだが、その本性は普通の同年代の青年と同じ。むしろ、今まで戦闘に次ぐ戦闘で抑圧されていた分それ以上かもしれない。

容貌は『マブラヴ』の主人公、白銀武を黒髪黒目にした感じで想像していただければ。って、それだとほとんど倉成の方の武か…名前の読み方違うけど。

第三話　―学園内は女の花園―

「さて、今日はＩＳ学園の受験日よ。わざわざタイムスリップしてきたのにここで落ちるなんてヘマはしないでね？」
「大丈夫さ…じゃ、行ってくる」
そう、今日はいよいよＩＳ学園の受験日。ここでヘマをしたらいきなり作戦失敗なわけだが…大丈夫だろう。

今は二月の真ん中。俺は１７歳なんだが、悠子が１５歳で戸籍を作ってくれたので入試を受けられることになった。転入となると面倒だからな。
「…あ、ここか」
地図を睨みながら歩くこと十数分。ようやく受験会場に到着した。畜生、なんでこんなに複雑なんだよ。
「あー、君、受験生だよね。はい、向こうで着替えて。時間押してるから急いでね」
ドアを開けた瞬間、女性教師に矢継ぎ早に言われる。こっちの顔すら見ていない。誤魔化す案を色々考えていた俺が馬鹿みたいだ。
（めちゃくちゃ忙しそうだな…まぁ、あっさり入れたのは重畳）
そう思ってカーテンを開けると、鎧が鎮座していた。
…いや、鎧ではない。これは、『ＩＳ』だ。
「…さて、こっちのＩＳも使えるかどうか…」
いや、使える。そう確信して、俺はそれに触れた。
――キンッ。耳慣れた金属質の音が頭に響く。
そして一瞬後、俺はＩＳを纏っていた。
「…第一段階、クリア」
続けて試験官との戦闘があるはずだ。確か、これで適性判定を測るらしい。
そんなことを考えていたら、ＩＳを装備した女性…恐らく試験官が

現れた。
「こっ、これより、試験を開始します！」
…何故かめちゃくちゃ緊張している。ちなみに、戦場で死ぬのはパニックを起こした奴からだ。その次は相手を舐めてかかった奴。適度に緊張している奴は一番生き残りやすい。ソースは俺の経験。
「い、行きますっ！」
こっちが心配になるくらいガッチガチになった試験官は、なんとまっすぐ突っ込んできた！
「武装…ブレードだけか！」
なら、こっちも真っ向勝負しかない。覚悟を決め、ブレードを構える。
「チェストォォォッ！」
南無三、真っ二つ…にはならない。とは言え、相手は行動不能になったようだ。まぁ、袈裟斬りを真っ正面から直撃させられたんだから無理もないか。
こうして、俺の受験はあっさり終わりを告げた。

「あら、おかえり。どうだったの？」
家に帰ってリビングの扉を開けると、そこに悠子がいた。
「多分受かったんじゃないかな。試験官との勝負にも勝ったし」
「へぇ、流石はエースね…あ、これからＩＳで戦闘したらそのデータを送ってくれない？」
「戦闘データを？別に構わないが…」
何に使うんだろう。ＩＳの研究をしているわけじゃないだろうし。
「春樹のＩＳ…不知火だったかしら？の改修データが例の書類に入ってたんだけど…間に合わなかったのかしらね。今までの戦闘データの所に抜けが多いのよ」
不知火の改修データ。そんなものまで入れてたのか。
すでに俺の不知火は改式としてカスタムしてあるが、悪竜と戦わなければならないなら確かに改修する必要があるだろう。

「主にエネルギー武装を使えるようにする改修みたいね…不知火、実弾一辺倒だものね」
「なるほど、エネルギー武装か…助かるな」
「まぁ、例の相手に間に合わなかったらどうしようもないんだけど…だから、せいぜい経験値を稼ぎなさい。唯一の男性ＩＳ操縦者なんだから、挑んでくる相手は多いでしょうよ」
激励かどうか際どいラインだが、多分彼女的には激励だろう。その激励を受け取って、俺は自室に向かった。

「はぁ…」
大きな溜息。いったいこれは本日何回目の溜息だろうか。
俺は今、ＩＳ学園の校門前に立っている。そう、今日は入学式。桜もいい具合に咲き誇っていて、俺達の門出を祝福してくれている…気がする。
「はぁ…」
…わかっていたこととは言え、自分以外全員女って状況は落ち着かない。さっさと男用ＩＳを開発して欲しいものだ。
そんなことを考えていたらいつの間にか入学式が終わって、いつの間にか教室にいた。入学式の間は軽く意識が飛んでたんじゃなかろうか。女子独特の香りにやられたに違いない。

「全員揃ってますねー。それじゃあＳＨＲをはじめますよー」
黒板の前でにっこりと微笑む女性教師。確かこのクラスの副担任で、名前は山田真耶。ちなみにこの名前は回文になっている。上から読んでも下から読んでもヤマダマヤ。どうでもいいか。
「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」
「……」
…可哀想に。なぜか妙な緊張感に包まれた生徒達は何も反応を示さない。ちなみに俺は包まれてるサイドだ。
「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

うろたえながらもきちんと指示を出せる辺りは教師か。でも何だか泣きそうに見えるのは俺だけだろうか。
ちなみに、俺の座席は真ん中の最前列。教壇の目の前にして、クラスメイトの視線が最も集まりやすい場所だ。現に、今ものすごい数の視線に晒されている。ごめんなさい総司令、俺の心は悪竜に会う前に折れてしまいそうです。
「…くんっ、香月春樹くんっ」
「…はっ！」
名前を呼ばれ、つい反射で勢いよく立ち上がってしまう。しかも妙に軍隊っぽい返事までしてしまった。案の定周りからはポカーンとした空気が漂ってきている。畜生、せめて笑ってくれよ。
「あっ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい！お、怒ってる？怒ってるかな？ごめんなさい、ごめんなさい！でもね、あのね、自己紹介…」
案の定ものすごいパニックを起こしていた…2ヶ月くらい前に似たような人を見たような気がしたが、はて。どこでだったろうか。
「あぁ、自己紹介。わかりました」
「し、してくれるんですか？本当ですね？絶対ですね？」
驚異的な速度で顔を上げ、俺の手を取って詰め寄ってくる。なんでこの人はこんなに落ち着かないのだろう。俺が男だからだろうか。ＩＳ学園には女しかいないわけで、男に対する免疫が皆無なのかもしれない。そう言うことにしておこう。
さて、自己紹介。姿勢を正し、後ろを向く。
（…うおお、すごい量の視線…）
クラス中の目がすべて俺に向いている。それは一種のホラーだ。とは言え、ここで逃げるわけにはいかない。学園生活を送る以上、仲良くなって損はないだろう。
「香月春樹です。ＩＳには不慣れなので何かと迷惑をかけるかもしれませんが、これから一年間よろしくお願いします」
そして一礼。周りの空気はおおむね好意的だ。まぁ、多少物足りな

さそうな雰囲気は感じるが。
…ちなみに、ＩＳに不慣れなのはあながち嘘じゃない。確かに実戦経験は豊富だが、その分座学が弱い。ＩＳの歴史なんて知ったこっちゃない。ものすごく分厚い参考書を読んでみたが、三割くらいしか理解できなかった。
「おぉー、何だか真面目そう」
「誠実そうだよねー」
そんな声が聞こえた。俺の本性はもっと不真面目だったはずなんだけどな。叢雲にいるうちに殺されちまった気がする。
俺の自己紹介の後も自己紹介は続いている。しかし、様々な国の人が一堂に会していると言うのはなかなかに壮観だ。髪の色一つ取ってもまぁカラフルだこと。黒金茶赤青紫白…
そう言えば、このクラスの担任がまだ来ていないことを思い出した。確か前にいる童顔巨乳教師は副担任のはず。そう思っていると、教室前側の扉が開いた。そこから入ってきたのは…
「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」
「あぁ、山田先生。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかったな」
――織斑千冬。織斑一夏の姉…つまり、俺の叔母にあたる。実は俺の格闘技術の多くはこの叔母さんに叩き込まれたものだったりする。そうか、ＩＳ学園で教師をやっていたのか…織斑先生、と呼ぶべきだろうな。
「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者は出来るまで指導してやる。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」
…『逆らってもいい』と『私の言うことは聞け』は矛盾してると思うのだが。なんという暴論。
しかし、教室に響いたのは困惑のざわめきではなく黄色い声だった。
「キャー！千冬様、本物の千冬様よ！」
「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！南北海道から！」
お姉様。なんだ、一号と二号に乗って合体でもするのか。もちろん必殺技は超稲妻蹴り。
そんな感じできゃいきゃい騒ぐ女子達を、織斑先生はかなり鬱陶しそうな顔で見る。
「…毎年毎年、よくもこれだけの馬鹿者が集まるものだ。何か、私のクラスに馬鹿者を集中させてるのか？」
これが教育者の言葉か。弟さん（つまり俺の父さん、織斑一夏のことだ）に向けているデレ、もとい愛情の一割でも分けてやってほしい。
…と思っていた俺が浅はかだった。
「きゃあああっ！お姉様！もっと叱って！罵って！」
「でも時には優しくして！」
「そしてつけあがらないように躾をして～！」
変態による三連コンボが決まった。入学初日にしてすでにフルスロットルである。
そんなどうでもいいことを考えていると、チャイムが鳴った。
「さぁ、ＳＨＲは終わりだ。諸君等にはこれからＩＳの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませろ。いいか？いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ。私の言葉には返事をしろ」
またもやものすごい暴論。何だろう、この人は鬼の皮を被った悪魔だろうか。あ、それじゃまったくの人外か。それは流石に失礼だな。とりあえず、次はＩＳの基礎知識か。それくらいなら覚えているからなんとかなるかな。
「…あー…」
参った。これは駄目だ、耐えられない。
一時間目のＩＳ基礎理論授業が終わった休み時間、しかし俺の心はまったく休まっていなかった。
それは当然、女子からの視線である。ちなみに隣クラスの女子もい

るとかそんな生半可な状況じゃない。この学校にいる女子と言う女子が廊下にいる。床が抜けたりしないだろうか。
しかし、誰も話しかけてこない。お互いを牽制しあってるのかなんなのか、妙な緊張感に満ちている。落ち着かない。かと言ってこっちから打って出るのも愚策。さてどうしたものか…
そして俺の打ち出した策は、無視である。一心不乱に教科書を読む。廊下にひしめく女子には目もくれない。どうでもいいが、『ひしめく』を漢字で書くと『犇めく』になる。牛牛牛。
キーンコーンカーンコーン――――
よし、時間切れだ！廊下にいた女子生徒も蜘蛛の子を散らすように去っていく。さて、次もＩＳ基礎理論。さっき教科書を読んでいたので予習はバッチリだ。

「ちょっと、よろしくて？」
「…何だ？」
二時間目の休み時間、再び教科書を開こうとした俺は突然声をかけられた。相手は金髪美少女。しかもお嬢様オーラ全開。多分イギリスかそのあたりの人。
「まぁ！なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんではないかしら？」
「いや、そんなに偉そうにされてもな。大体お前誰だよ？名前くらい名乗ってくれ」
自己紹介では名乗ったのだろうが、よく覚えていない。だから怒らせる覚悟で真実をそのまま伝えた…まぁ、高飛車な態度に対するイライラが出ていたのは否定しない。
案の定そのお嬢様はお冠。目尻を釣り上げ、いかにも男を見下した口調で続ける。
「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

…代表候補生か。そりゃ威張るわけだ。国家代表の候補生、つまりエリート。だが…
「で、その代表候補生サマが何のご用で？」
「…貴方、馬鹿にしていますの？」
敬ってやってるのに失礼な奴だ。
「大体、貴方ＩＳについてあまり知らないくせによくこの学園に入れましたわね。唯一ＩＳを操縦できる男と聞いて、少しくらいの知的さは期待してましたが…はぁ」
「勝手に期待するなよ…」
そして溜息やめろ。悲しくなる。
「まぁ？わたくしは優秀ですから貴方のような人間にも優しくしてあげますわよ」
そうか。お前はまず辞書で優しさの意味を調べるべきだな。
「ＩＳのことでわからないことがあれば、まぁ…泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよろしくてよ？何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」
唯一、がものすごく強調されている。だが残念だったな。
「悪い、教官なら俺も倒したわ」
「えっ」
「真っ正面から突っ込んできたんで、袈裟斬りにしたら一発」「な…わ、わたくしだけではありませんの？」
「まぁ、女子で唯一ってオチだろ」
ピシッ。俺の言葉はそんなにショックだったのか、心か何かに亀裂が生じる音が聞こえた。あー、嫌な予感。でも、またまた残念。
キーンコーンカーンコーン――
三時間目開始のチャイム。これにより話は強制終了となる。
「くっ…覚えてらっしゃい！」
だが断る。席に戻る彼女の背中に、心の中で呟いた。
「それでは、この時間は…っと、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな。ちなみに、代表者とは

言わばクラス長だ。クラスの代表として様々な会議などに出席させられる。一度決まると一年間変更はないのでそのつもりで」
教室がざわつく。誰が立候補するか、あるいは誰を推薦するか。まぁ、大体推薦されるのは誰か予想はつくが…
「はいっ！香月くんを推薦します！」
――ほら来た。学校唯一の男である俺は推薦されると思っていた。
まぁ、戦闘回数が増えるので代表になるのはやぶさかではない。会議は…そこにいればいいだろう。
さらに俺を推薦する声が上がる。そのまま俺に決定しようと言うとき…
「納得いきませんわ！」
机を叩いて立ち上がったのはセシリア・オルコット。
「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」
…何を言っているんだ、こいつは。要するに自分がクラス代表になりたいってことか？自分勝手なこった。
「…納得いかないのはこっちの方だ」
流石に堪忍袋の尾が切れた。立ち上がり、セシリアを見据える。
「そんなに威張り散らして、何様のつもりだ？」
「…なっ！」
まさか反論されるとは思わなかったのだろう。その隙に言いたいことをリボルバーに込め、連続で放つ。
「代表候補生？入試主席？それがどうした。実戦では肩書きなんぞ無意味だ。特に、実力が伴わない肩書きはな」
「わたくしが弱いとおっしゃいますの！？」
「少なくとも、肩書きを盾にふんぞり返ってるようじゃ弱者だ」
「ぐぬぬ…そこまで言うなら！」
「ふん、ここまで言ってわからないなら！」
「「決闘だ！（ですわ！）」」

第三話　―学園内は女の花園―（後書き）

次回はセシリアとの戦闘。上手く書けるかな…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4303z/

IS ―滅びの未来から―

2011年12月17日23時54分発行